

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

## 潮流

メタデータ	言語: ja 出版者: 神戸市外国語大学研究会 公開日: 2023-12-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 篠田 実紀 メールアドレス: 所属: 神戸市外国語大学
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2000013">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2000013</a>

## 潮流

篠田 実紀

特別な愛着もないのに、ある場所が人生の重要な局面を占める空間となることがある。神戸市外国語大学（以下「外大」）は、私にとってそういう空間だった。学部生・大学院生として六甲の学舎で過ごした7年間と、専任教員になる前に非常勤講師として勤務した1年間を合わせると、40年という長きにわたってこの大学に関係してきたことになる。Kurt Vonnegut 流に言えば、外大との関わりは、自分の“free will”ではどうすることもできない“fate”であったと言えるかもしれない。しかし、この空間で出会った教職員や学生など数多くの人々との交流を通して私が学んだことは計り知れず、それらの出会いは私を大きく成長させてくれた。そして血の気が多い私が同じ職場に長期にわたり留まることができたのも、心寛き同僚諸氏と優秀な学生たちのおかげであると、深い感謝の念に堪えない。

退職に際し研究室を整理していたら、授業で使用した夥しい数のプリント類や校内業務の書類に加え、カセットテープ、VHSテープ、ラジカセ、フロッピーディスクなど、懐かしいアイテムが姿を現した。私が外大国際関係学科の専任講師として赴任した1991年は、冷戦終結を迎え国際情勢が大きく変化した時代であるとともに、テクノロジーの面ではアナログからデジタルへの移行期でもあった。国際社会における日本の立場も転機を迎えており、高度成長期を経てバブルが崩壊、日本経済は下降線を辿り始めていた。国際関係学科で専攻英語を担当する専任教員として私が外大に勤めた32年間、国際情勢もテクノロジーも急速に変化し続け、教育研究環境も常にその変化への対応を余儀なくされた。

現実の社会情勢や文化現象を取り扱う国際関係学科の多くの先生方の専門分野とは異なり、私が専門とする文学は、不条理と非現実と虚構の世界に大きく足を踏み入れた領域である。現実を離れた分野にほとんど興味を示さない国際関係学科の学生に対して文学作品を扱う講読の授業を行うことに戸惑いがなかったわけではない。しかし、幸い私は現実の出来事にも興味があったので、学生に遅

れを取らぬよう、時には彼らの知識を共有してもらい、国際情勢をフォローしながら、文学の面白さを少しでもわかってもらえたらいいという気持ちで授業をした。テキストとして選んだ戦争や移民に関する文学作品を通して、学生たちが無機質な歴史的「事実」として処理される出来事の背後にある個人の感情に触れ、想像力を用いて事実を迫体験することにより、その事実を「実感」することが、私の授業の狙いであった。

PC を使うことが一般的になってもインターネットが普及していない 1990 年代前半、リアルタイムで国際情勢を把握することは容易ではなかった。研究や授業で使う洋書を購入する場合は、生協や洋書店経由で入手する必要があった。日本に在庫がない場合は海外から取り寄せることになるため、高額な送料とかなりの時間を要した。新聞や雑誌も仲介業者を通して同様に費用と時間がかかる手続きを取らない限り入手できず、リアルタイムで読むことは不可能であった。ただ、その当時は NHK の衛星放送が始まっており、リアルタイムではないものの、家庭のテレビを BS アンテナに接続さえすれば、少しの時間差で BBC や ABC をはじめ、世界各国のニュースを副音声としてオリジナルの言語で視聴することができるのが救いであった。授業では、自宅のテレビで VHS テープに録画した衛星放送の海外ニュースを教室に設置されたデッキで再生することにより、世界の現実を少しでも伝えられたのではないかと思う。

1990 年代後半になるとインターネットの時代に入り、大学にもようやく学内 LAN が設置された。インターネットにより海外メディアの視聴もリアルタイムで、しかもほとんど無料でできるようになり、洋書も Amazon.co.jp など安く早く手に入るようになった。

21 世紀に入ると、授業は教室に PC を持ち込んでインターネットに接続して PowerPoint などのスライドで画像や映像を見せるという形態にシフトし、学生たちはもはや教員の語りと板書とプリントという「言葉」だけの授業には退屈するようになった。元来「言葉」で勝負する文学作品を読み解くにあたり、画像や映像を見せることによって読み手の自由な想像力を阻害する危険性を孕む可能性はあったが、作品を読むに際して必要な予備知識を与えるには、視覚的な要素は効果的であった。

2020 年に始まったコロナ禍では、授業のオンライン配信が必要となり、スライドを用いたプレゼンテーションが重要な位置を占めるようになった。オンライン授業では対面授業のような直接的なインパクトは伝わらないものの、遠方に住む学生や早起きが苦手な学生、声が小さい学生でもストレスなく参加できるというメリットがあった。世界各地で開催される講演会やイベントにも手軽にオンライン参加できるようになり、皮肉にも、コロナ禍がアカデミズムにおけるインタ

一ネットの可能性を広げたとと言える。

しかしデジタル化が進む現在、アカデミズムは大きな岐路に差し掛かっている。Google などの検索機能、さらにスマートフォンや SNS の普及、最近では高性能の翻訳アプリや ChatGPT などの生成 AI の出現により、アカデミズムの本質が問われる時代が到来している。以前は努力を重ね時間をかけて導き出していた解が、AI により瞬時に手に入るようになった。外国語運用もその一つである。人間が語学の技能を習得しても AI に勝てない時代は、すぐそこまで来ている。技能習得に重点を置いた従来の語学教育は、見直しを求められるだろう。相手の話の内容を理解し、自分の意見を相手に伝えるだけでなく、状況を読みながら意見を戦わせ、交渉し、協力する能力が必要となっている。

AI の進化により簡単に「答」が手に入り、学びが便利で多様になった分、「答」そのものの権威が低くなり、人間の仕事は、その答をいかに応用し発展させていくかという過程にシフトしていくのではないだろうか。人と人がコミュニケーションの中で各自の「答」を戦わせ、新しい「答」を導き出そうとする議論や交渉の場が重要性を帯びてくる。そこから生じる予測・編集・変換不能の *spontaneity* (自発性) は、AI が制御できないアドリブの「呼吸」である。権威ある単一の基準に従う文化が根強い日本では、自然発生的な議論を行うことが困難である。確かに、この基準に従う文化は、20 世紀日本経済の高度成長を支えた。力のあるリーダーの指示や 1 つのマニュアルに従業員が忠実に従い、役割分担をして各自が目目の前の単一の仕事を機械的にこなすことにより、同じ部品の大量生産を可能にしたのである。しかし、時代は変わり、高性能のハードウェアを大量生産・消費する時代から、臨機応変に次々とソフトウェアを開発する時代になった。分業ではなく、従業員間の部署横断的なコミュニケーションを通して生まれるイノベーションが、今後の日本経済・日本社会の鍵を握るのではないだろうか。

人は生きる時代を選ぶことはできない。刻々と変化する時間というどうしようもない“fate”の流れの中で、ある時は流れに身を委ね、時には強い“free will”をもって抗う、という柔軟性が必要だろう。混沌を極める社会情勢の中で、神戸市外国語大学はどのような航海をするのだろうか。潮目を読む経験値と分析力、舵取りの判断と実行力、多様な特性を活かしつつ取りまとめる統合力、そして何よりも、組織の構成員各自が全体像を俯瞰し、人任せにせず、それぞれの角度から舵取りの責任を担うという自覚が、今求められていると思う。

外大丸を下船した私は、小さなボートに乗り換えて新たな船旅に出ることになる。今しばらくは、酷使した交感神経を労いつつ、心地よい解放感に身を委ねて波の間に間にゆったりと漂っていたい。